

小品系般若經〈久発意菩薩品〉の教説構造

勝 崎 裕 彦

一

小品系般若經〈久発意菩薩品〉とは、梶芳光運博士の「般若経科判」にいう「第二編実相品・第五章久発意菩薩品」に相当する箇所の章段名である。^①もとより梶芳博士は、小品系統の無叉羅訳『放光般若経』を基軸として、小品系統の支婁迦讖訳『道行般若経』を含ませた科文を制作されたわけで、筆者は、この中からとくに原初的な小品系統の経文に焦点を絞って考察を進めている。^②すなわち、小品系般若経の本体の教説は「第二編実相品」の中に組み込まれ、第一章品〈須菩提品〉を冒頭の出発章品として、第二章品〈天王品〉・第三章品〈種姓品〉（筆者は、〈善男子善女人品〉と呼び換えている）・第四章品〈新発意菩薩品〉・第五章品〈久発意菩薩品〉・第六章品〈不退転菩薩品〉・第七章品〈総摂品〉へと継承展開し、最終の菩薩行道篇の章品と考えられる〈常啼菩薩品〉を別編としている。梶芳博士は、新発意菩薩↓久発意菩薩↓不退転

菩薩↓一生補処菩薩という『般若経』の四種菩薩の階位の進展によつて経文の構成要素を解析し、ここにいる小品系統では、〈新発意菩薩品〉↓〈久発意菩薩品〉↓〈不退転菩薩品〉の三階位によつての章別・科判へと大成されたのである。^③

本稿では第五章品〈久発意菩薩品〉の経文解釈を旨指して、小品系統に説かれる久発意菩薩をめぐる教説過程を分析整理したい。^④いうところの久発意菩薩（cirayāna-samprasthita-bodhi-gatta）とは、久発心菩薩とか久行菩薩、久修習菩薩などと訳されて、新発意菩薩に続く小品系般若経の第二階位の菩薩である。最初の発心をしてから、すでに久しい時間も経過し、なによりも、すでに久しい修行を積み重ねてきた菩薩である。大乘菩薩道に進み入って、久しい間の修習実践を繰り返してきた先輩の菩薩、古参の菩薩である。『大般若経』第四・五会などの玄奘訳では、「久発心修諸勝行菩薩」と訳されているから、いろいろなすぐれた菩薩の修行を久しく行なつて、よく勤め修めている菩薩という理解である。すなわち〈久発

意菩薩品〕は、前段の〈新發意菩薩品〉の教説を繼承して、菩薩行の繼續と深化を促し、般若波羅蜜の教説のさらなる展開を構築しようとする章段を形成している。

ところで本稿でも論題に「教説構造」と標記したが、これは、梶芳博士が「般若經科判」によって示された小品系統の『放光般若經』の科節・分段に依拠しながら、小品系般若經の經文に戻って先行教説を把握し、解釈しようとすることに

ほかならない。小品系統から小品系統へと増広拡大した大部般若經典の形成過程を視野に入れながら、教説内容の祖型を確認しようとする視座に立つもので、〈久發意菩薩品〉の理解への道すじをさぐりたい。

二

まず左に〈久發意菩薩品〉の各種テキストの章品名について、小品系統の基本的な各種諸本の比較対照表を掲示する。⁽⁵⁾

◎小品系般若經（久發意菩薩品）章品名一覽表

(H)	(G)	(F)	(E)	(D)	(C)	(B)	(A)		
								(I)	(II)
⑫譬喩品	〃	⑪不可計品	〃	〃	⑩照明品	⑨覺品	⑧持品	支婁迦讖訳 『道行經』	支謙訳 『大明度經』
⑫譬喩品	〃	⑪不可計品	〃	〃	⑩照明十方品	⑨覺邪品	⑧悉持品	竺法護訳 『鈔經』	鳩摩羅什訳 『小品經』
								(III)	(IV)
⑭船喩品	〃	〃	⑬相無相品	〃	⑫小如品	⑪魔事品	⑩不可思議品		
⑭譬喩品	〃	⑬不思議品	〃	〃	⑫顯示世間品	⑪惡者障法品	⑩讚持品	(V)	施護訳 『仏母出生經』
⑭譬喩品	〃	⑬不思議品	〃	〃	⑫現世品	⑪魔品	⑩称讃功德品	(VI)	法賢訳 『宝徳蔵經』
〃	⑭譬喩品	⑬不思議等品	〃	⑫現世間品	〃	⑪魔事品	⑩総持品	(VII)	玄奘訳 『第四会』
⑭船等喩品	〃	〃	⑬甚深相品	⑫真如品	〃	⑪魔事品	⑩不思議品	(VIII)	玄奘訳 『第五会』
〃	⑭Aupamyā-p.	⑬Acintya-p.	〃	〃	⑫Lokasandarsana-p.	⑪Marakama-p.	⑩Dharmasūtra-parkṛtana-p.	(IX)	Skt. 『八千頌』
〃	⑭譬喩品	⑬不思議品	〃	〃	⑫正示世間品	⑪魔業品	⑩称讃執事功德品	(X)	Tib. 『八千頌』

これらの各種章品区分並びに章品名を一瞥してみると、おむね、〔A〕讚持品↓〔B〕魔事品↓〔C〕少如品↓〔F〕不思議品↓〔H〕譬喩品という五品五区分の教説展開によつて、〔久発意菩薩品〕が構成されていることが理解されよう。もとより各種テキストの章品の分量及びその対照関係による区切りにはいささか異同があり、〔A〕↘〔H〕の区分も右に示した品名の呼称法も、とりあえずは便宜的に記述するものである。

この中、〔A〕については、ここでは仮に『仏母出生三法藏般若経』の施護訳に従つて讚持品と呼称したが、その意味合いは般若波羅蜜の受持・護持・総持による功德を称讃することの謂である。IXのサンスクリット本では *dharaṇaguna-parikṛtana* (総持の功德の称讃) とあり、V・VI・Xと同義で、古訳のI・II、玄奘訳VIIも同旨と考えてよい。ただ、鳩摩羅什訳IVと玄奘訳VIIIが「不(可)思議品」と訳しているのは、般若波羅蜜を久行・久修習する菩薩道において、一切法、一切智も不分別・不可思議にして、さらには後述するように、『般若経』の教えやその流布のありようが示されて、不思議にして得がたいすぐれた教説として受けとめたからであろう。^⑦

〔B〕魔事品は、いわゆる「魔事」、魔の所行 (*māra-kamma*) を述べる重要な章品であり、IV・V・VI・VII・VIII・IX・Xは同義である。この邪惡の惡魔のなしわざに気づくというか、

魔行をわきまえるという意味で、古訳I・IIの品名がある。

〔C〕小如品は、IVの『小品般若経』の品名から名づけたが、これは同じ『小品般若経』大如品第十五の品名に対応するものとして、VIIIの「真如品」にも留意しながら、鳩摩羅什訳の意義に注目しているからである。大如品第十五は、〔久発意菩薩品〕に続く第六章品(不退転菩薩品)の初段に位置する章品である。ところで、ほかの各種テキストを見ると、IXが *loka-saṃdarsana* (世界の示現) と名づけていることに照応し、古訳のI・IIから、V・VI・VII・Xも同旨と見てよい。

〔F〕不思議品は、I・II・V・VI・VII・IX・Xの大方の品名によつたが、ここでも、IVは「相無相品」とし、VIIIは「甚深相品」として、上掲の章品区分では共に〔E〕段から説示されている。しかしながらその趣旨は、いずれも般若波羅蜜のはたらきの無執着・不分別のありようを受けとめたもので、一方は不思議と理解し、他方は甚深無相と理解したのである。そして最終の〔H〕譬喩品は、各種テキスト類同で、難破した船の譬喩を強調するIV・VIIIが「船(等)喩品」という品名である。I・II・IV・V・VI・VIIIは、この破船の譬喩を品初冒頭に置いているが、ちなみに本稿でも主として依用する鳩摩羅什訳『小品般若経』の船喩品第十四は、

爾時佛告須菩提譬如大海中船卒破其中人若不取木板般若浮囊若死屍。當知是人不到彼岸沒水而死。須菩提。其中人若取木板浮囊死

屍。當知是人不沒水死。安隱無惱得至彼岸（大正八・五六〇b）と説かれてゐる。般若波羅蜜によく守護されていれば、中道にして退くことなく、声聞辟支仏地を過ぎて、まさに阿耨多羅三藐三菩提に住するということを説明するための最初の譬喩である。

三

梶芳博士の考究にはじまる第五章品（久発意菩薩品）の章段は、いうまでもなく、前段の第四章品（新発意菩薩品）の教説を継承して展開するのである。すなわち、「新発意菩薩の章」から「久発意菩薩の章」へと受け継がれるその内容は、般若波羅蜜の教えを繰り返し修習し、久しく修行する菩薩のあり方として教示されている。しかもその教説の様式は、仏を中心に、須菩提、舍利弗、帝釈天という主要な対告衆が、それぞれの役割を定めた問答形式によつて展開する小品系般若經の基本構図の中で説示されるのである。

とりわけ、〈久発意菩薩品〉の第一段の（A）讚持品は、久行・久修習・久発意の菩薩思想を提起し、加えて〈久発意菩薩品〉全体の基調を要約する重要な章品である。ここでは『小品般若經』不可思議品第十の經文によりながら、小品系般若經の構成上の基本形といつてよい説示形式を辿つてみよう。

まず最初に、帝釈天（釈提桓因）が、

爾時釋提桓因作是念。若人得聞般若波羅蜜者。當知是人已曾供養諸佛。何況受持讀誦。如所說學如所說行。若人聞說深般若波羅蜜。受持讀誦如所說行。當知是人已曾多供養佛廣問其義。於過去諸佛。聞深般若波羅蜜。不驚不怖（大正八・五五三c）と問い起す冒頭の言葉に対して、舍利弗が帝釈天の思案を推察して、

爾時舍利弗白佛言。世尊。若菩薩摩訶薩。能信解深般若波羅蜜。當知是菩薩如阿毘跋致。何以故。世尊。若人於過去世。不久行深般若波羅蜜。則不能信解（大正八・五五三c）と述べて、仏の教えを改めて要請するところから教説がはじま

る。ここではすでに深い般若波羅蜜（gambhīra-prajñāpāramitā）とされているが、現在において深い般若波羅蜜をよく聞いて、受持・読誦し、よく信解しているものは、過去においても般若波羅蜜をよく信解していたにちがいない。とすれば、過去から久しく般若波羅蜜を行じていないものは、現在においてよく信解することができないにちがいない、という帝釈天や舍利弗の一つの疑義である。これに対して、仏の助言のごとき教えから、舍利弗も帝釈天も、深い般若波羅蜜を現在においてよく聞いているものは、すでに久しい間にわたつて般若波羅蜜を聞いて、久しく大乘に進み入つた菩薩であると、お互いにみずから気づき、わきまえることになる。すなわち、

佛言。如是如是舍利弗。若未受記菩薩。得聞深般若波羅蜜。當知是菩薩久發大乘心（大正八・五五四a—b）

atha khalu Bhagavān āyusmanam Śāriputram etad avocaṭ — evaṃ etad
Chāriputraivam etat — dūratat sa Śāriputra bodhisatto mahāsatta āgato
vedtiyayh cira-yāna-samprasthiat paripakva-kuśala-mūlo hi sa
Śāriputra bodhisatto mahāsatto bhaviyati ya imāṃ gambhīrāṃ
prajāpātamiām lapseyate daśanāya vandanāya paryupāsanaṃyā śravanāya
— kaḥ punar vādo 'tra yaḥ śrutvā cōdgrahisyati dhārayisyati vācayisyati
paryavāpisyati paravattisyati desayisyati upadekisyati uddekisyati svādhy-
āsyati — (Aṣṭa. ed. U. Wogihara. p.469)
という仏の教えが帰結となる。

ついで舍利弗が適切な譬喩を思いついて説き明かし、結局は、

佛言。善哉善哉舍利弗。汝所樂說者皆佛神力 (大正八・五五四c)
evam uke Bhagavān āyusmantam Śāriputram etad avocaṭ — sādhu sādhu
Śāriputra — idam api te Śāriputra buddhānubhāvena prathāti — (Aṣṭi
a. p.475)

とあるように、舍利弗は仏の讃辞を受け、樂説 (prathāna)
と仏の威神力 (buddha-anubhāva) を確認するのである。

ここに至つてようやく須菩提が登場し、

須菩提白佛言。世尊。菩薩摩訶薩詞薩云何得具足修習行般若波羅
蜜 (大正八・五五四c)

と問い尋ねて、仏が菩薩道を久行するものの姿を説き示すこ
とになる。すなわち、

世尊。般若波羅蜜如是誰能信解。須菩提。若久行菩薩道者。世尊。

小品系般若經 (久発意菩薩品) の教説構造 (勝崎)

云何菩薩得名久行。須菩提。若菩薩行般若波羅蜜。不分別佛十力
四無所畏。乃至不分別薩婆若。是名久行。何以故。佛十力不可思
議。四無所畏十八不共法不可思議。乃至薩婆若不可思議。色不可
思議。受想行識不可思議。一切法亦不可思議。菩薩如是行者。是
名無處所行而行般若波羅蜜。是故名爲久行 (大正八・五五四c—
五五五a)

という仏と須菩提の問答で示される。菩薩が般若波羅蜜を行
ずる時、仏の十力・四無所畏以下、一切智 (sarvajñatā) に至
るまで不分別であるならば、つまり執らわれないならば、そ
れを菩薩道を久行することと名づけるとし、そのわけは仏の
十力・四無所畏以下、一切法は不可思議であるからであると
する。この不可思議 (acintya) を汲み取つて、『小品般若經』
は不可思議品第十の章品名としたのである。

そして続く一段では、

……須菩提。若善男子善女人。欲書寫讀誦如所說行般若波羅蜜乃
至一歲當疾疾爲之。須菩提。珍寶法多有怨賊。世尊。般若波羅蜜。

惡魔常欲伺求斷絕。須菩提。惡魔雖欲伺求斷絕亦不能得。舍利弗
白佛言。世尊。誰神力故。惡魔不能留難般若波羅蜜。舍利弗。佛

神力故惡魔不能留難 (大正八・五五五a)

という惡魔の障害をよく克服することを説き、仏の威神力に
よつて、さらに諸仏の加護・護念によつて魔の所行が超克さ
れると説き進められる。加えて、善男子・善女人へ向けて、
般若波羅蜜の受持・読誦・書写を勧奨して、実はここではま

ず書写を第一に挙げて、その福德の多い旨を説き明かす。

舍利弗。若求佛道善男子善女人。受持讀誦般若波羅蜜。則近阿耨多羅三藐三菩提。乃至自書若使人書。書已受持讀誦。以是因縁其福甚多（大正八・五五五a）

右の經文によれば、みずから書写することに加えて、他の人々にも書写を勧める功德が強調されている。

以上の教説を解釈すれば、およそ次のように整理することができる。

- (一) 仏を中心に登場する須菩提、舍利弗、帝釈天の応答經文
- (二) 「善哉善哉」の讃辭と樂説及び仏の威神力の承認
- (三) 「不驚不怖（不没不退）」の基本提題による繰り返しの反省
- (四) 『小品般若經』初品第一で、新發意菩薩のあるべき姿として、「是名發大乘心大莊嚴菩薩摩訶薩善知識」（大正八・五三八c）等と説かれていることに対応
- (五) 「魔事」、つまり惡魔の障害を挿入して、般若波羅蜜の実踐への警告

(六) 善男子・善女人への般若波羅蜜の受持・読誦・書写の勧奨
 このような『小品般若經』不可思議品第十を中心に見る〈久發意菩薩品〉の「A」の説示形態は、〈須菩提品〉〈天王品〉〈善男子善女人品〉〈新發意菩薩品〉と次第する小品系般若經の教説構造とまったく同様のものである。もとより同一經典の中の經文であるから、同じであつて当然であらうが、実はこの同種の説示形式の中にこそ小品系般若經の教説の基

調が確認されるわけで、このことを指摘する意味を本稿の一つの目的としたい。さらに付け加えれば、菩薩が般若波羅蜜を修習・修行して行く教説と、その教説を受持・読誦・書写して信仰を勧めて行く善男子・善女人の教説とが不可分に混成されていることも、明らかに指摘できる。「A」讃持品の呼称のように、般若波羅蜜の受持・読誦・書写の功德が大いに称讃されることになるわけである。

その意味で、「A」の品末によく知られる『般若經』の流布説が説かれることも首肯されるところとなる。いわゆる『般若經』の北方流布説である。『小品般若經』では、

舍利弗。如來滅後般若波羅蜜。當流布南方。從南方流布西方。從西方流布北方。舍利弗。我法盛時無有滅相。北方若有乃至書寫受持供養般若波羅蜜者。是人亦爲佛眼所見所知所念。舍利弗白佛言。世尊。後五百歲時。般若波羅蜜當廣流布北方耶。舍利弗。後五百歲當廣流布北方。其中善男子善女人。聞般若波羅蜜。受持讀誦修習。當知久發阿耨多羅三藐三菩提心（大正八・五五五a—b）

と記述されている。般若波羅蜜の教えは如來の滅後、まず南方で流布し、続いて西方に流布し、滅後五百年に北方に流布するという。「成立場所に関しては、意見はほぼ一致している。即ち南インドで發生し、西インドに移り、北インド（或は西北インド）で發展したという大部般若經典の記述が、真实性あるものと考えられている。（中略）このような記事は、般

若經典がクシャーナ (Kusāna) 朝時代に、北方で発展したことを推察せしめる⁹⁾ という見解を、今は諒としたい。ただここでは『小品般若經』の引文に見える「後五百歲當廣流布北方」の仏滅後五百年という記載に注意しておきたい。¹⁰⁾ あわせて、その中の善男子・善女子が般若波羅蜜を受持・誦誦・修習して久発無上正等菩提心となるという教説に留意したい。

四

〈久発意菩薩品〉の全容は、先掲したように、〔A〕～〔H〕の教説全般で教示されることはもとより当然のことである。しかしここでは紙幅の都合もあって、上述のように、〔A〕讚持品の教説構造の解釈を示して、後段の教説を推し測る程度に留めたい。

〔B〕魔事品では、魔の所行の超克を強調し、魔事を離れて久行・久修習することを勧説する。この章段は、〈新発意菩薩品〉の〔B〕地獄品に相当し、般若波羅蜜行の菩薩道の中でかならず通過しなければならない教説である。¹¹⁾

続く〔C〕少如品は、衆生心をはじめとする現象世界のありようの中で執着・分別を離れ、真如の実相をいかに理解して行くかということを書き進める章段であり、世間・世界の諸相を説示・顯示するという意味で、I・II・V・VI・VII・IX・Xの各種テキストの章品名は諒解できるし、VIIIの〔D〕

の「真如品」の品名も納得されるのである。ただこの章段のはじめには、いわゆる仏母の譬喩が示され、諸仏の一切智もすべて般若波羅蜜より生ずると説かれる。

須菩提譬如母人多有諸子。若十若百乃至十萬。其母有疾諸子各勤求救療。皆作是願。我等要當令母久壽身體安隱無諸苦患風雨寒熱蚊蚋毒螫。當以諸藥因緣令母安隱。何以故。生育我等賜與壽命。示悟世間其恩甚重。須菩提。今十方現在諸佛。常念般若波羅蜜。皆作是言。般若波羅蜜。能生諸佛。能示薩婆若。何以故。諸佛薩婆若。皆從般若波羅蜜生故 (大正八・五五七b-c)

lat kasya hetoah — esa hi māṇavaṃyitṛ tathāgataṃ arhatāṃ samyaksa-mbuddhāṃ aśyāḥ sarvajñatvā darśayitṛ lokasya ca sandarśayitṛ 〓 (Aśta. p.531)

『八千頌般若經』では、「如来の母であり、親である」と宣言しているが、般若波羅蜜の教説の一つの帰着点である。

そして、〔F〕不思議品で般若波羅蜜の無執着・不分別の不思議が説かれ、〔H〕譬喩品に示されるいくつかの喩えによつて改めて教説内容の理解を深めて行くことになる。

このように見ると、〔A〕讚持品に開示される教説を、〔B〕～〔H〕の諸段によつて再び詳説して繰り返し、深い般若波羅蜜の教えを改めて確認して行くのが、つまりは〈久発意菩薩品〉の教説構造の特色である。 (註省略)

〈キーワード〉 般若經、菩薩思想、久発意菩薩

(大正大学助教授)